

2020. 8. 2 (日) マタイ 21 : 28 ~ 32

21:28 ところで、あなたがたはどう思いますか。ある人に息子が二人いた。その人は兄のところに来て、『子よ、今日、ぶどう園に行ってお働いてくれ』と言った。

21:29 兄は『行きたくありません』と答えたが、後になって思い直し、出かけて行った。

21:30 その人は弟のところに来て、同じように言った。弟は『行きます、お父さん』と答えたが、行かなかった。

21:31 二人のうちのどちらが父の願ったとおりにしたでしょうか。」彼らは言った。「兄です。」イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言います。取税人たちや遊女たちが、あなたがたより先に神の国に入ります。

21:32 なぜなら、ヨハネがあなたがたのところに来て義の道を示したのに、あなたがたは信じず、取税人たちや遊女たちは信じたからです。あなたがたはそれを見ても、後で思い直して信じることをしませんでした。

<説教>

本日の箇所は主イエスがユダヤ人の宗教的・政治的指導者である「祭司長たちや民の長老たち」(23)にお話しになったたとえとその解説です。

「あなたがた」(28)とは、「祭司長たちや民の長老たち」のことです。

彼らはイエスの力あるみことばやみわざを見聞きしながらも、イエスを神の子キリストだと認めず、信じない人たちでした。

認めたくなかったし、信じたくありませんでした。

イエス・キリストだけが天の父なる神に立ち返る道、悔い改めの道であり、「義の道」(30)でありイエス・キリストを信じてこそ天の父なる神を本当の意味で信じることになるのですが、彼らはそうしようとしませんでした。

彼らはイエス・キリスト抜きで天の父なる神を信じていた、信じているつもりになっていました。

イエス・キリスト抜きで悔い改めたつもり、天の父なる神に従っているつもり、神のみこころ(御意思)を行っているつもりになっていました。

彼らはイエスが天(の父なる神)から受けた権威を認めようとせず、信じようとしませんでした。

イエスが天から来た権威そのものであられることを認めようとせず、信じようとしませんでした。

そして、そのイエスを信じるようにイエスを指し示した人、バプテスマのヨハネの言うことも信じようとしませんでした。

そんな彼らは、「ヨハネのバプテスマは、どこから来たものですか。天からですか、それとも人からですか。」(25)というイエスの質問に対しても真面目に答えようとしませんでした。

「分かりません」(27)という答えで自分たちの体面を取り繕い、ごまかそうとしたのでした。

しかしイエスには人間のごまかしはききません。

彼らに対して、イエスは更に一つのたとえをお話しなり、質問をなさいました。
そして彼らの答えを受けて、彼らにお教えになりました。
まず、イエスのたとえによる質問と、祭司長たちや民の長老たちの答えです。

21:28 ところで、あなたがたはどう思いますか。ある人に息子が二人いた。その人は兄のところに来て、『子よ、今日、ぶどう園に行ってお働いてくれ』と言った。

21:29 兄は『行きたくありません』と答えたが、後になって思い直し、出かけて行った。

21:30 その人は弟のところに来て、同じように言った。弟は『行きます、お父さん』と答えたが、行かなかった。

21:31 (前半) 二人のうちのどちらが父の願ったとおりにしたでしょうか。」彼らは言った。「兄です。」

なお欄外注にあるように、以前の改訂版、口語訳、文語訳などはこの箇所については別の写本に拠っていて、改訂版 2017 や新共同訳とは「兄」と「弟」が入れ替わっており、また「行くと言ったが行かなかった」ことが先に書かれ、「行きたくないと言ったが後で思い直して行った」ことが次に書かれています。

しかしどちらにしてもこのたとえでは、「二人いた」「息子」のうちで、「『行きたくありません』と初めは答えたが『後になって思い直し、出かけて行った』」「(最初の) 息子」と、「『行きます、お父さん』と答えたのに、結局は『行かなかった』」「(もう一方の) 息子」のことが言われ、比べられていることは同じです。

それで、このたとえの大事な点は、「二人のうちのどちらが父の願ったとおりにしたでしょうか」ということです。

「願ったとおりに」とは「意思のとおり」ということです。

「二人のうちのどちらが父の意思に従ったか、父の意思を行なったか」「あなたがたはどう思いますか」とイエスはお尋ねになりました。

先の「ヨハネのバプテスマは、どこから」とのイエスの問いには「分かりません」と答えた祭司長たちや民の長老たちも、今度は答えをごまかしようがありませんでした。

どう考えても「兄です」と答えるほかありませんでした。

そう答えた彼らに対してイエスはこのたとえによって、そして彼ら自身の答えによって明らかになる大事なことをお教えになりました。

それは彼らにとっては“都合の悪い事実”でした。

21:31 (後半) イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言います。取税人たちや遊女たちが、あなたがたより先に神の国に入ります。

21:32 なぜなら、ヨハネがあなたがたのところに来て義の道を示したのに、あなたがたは信じず、取税人たちや遊女たちは信じたからです。あなたがたはそれを見ても、後で思い直して信じることをしませんでした。

たとえの「兄」とは「取税人たちや遊女たち」のことであり、「弟」とは「あなたがた」祭司長たちや民の長老たちのことだとうことが分かります。

「取税人たち」は、異邦人の支配者ローマ帝国の手先となって同胞ユダヤ人から税金を取り立て、またそれで私腹を肥やしていた、言うならばユダヤ人たちにとって裏切り者たちでした。

「遊女たち」は律法に反し、姦淫を犯している“汚れた”者たちと見なされていました。

そんな「取税人たちや遊女たち」を特に祭司長たちや民の長老たちは“どうしようもない律法違反者、神への反逆者、罪人”と軽蔑し、見下していました。

しかしそんな罪深い「取税人たちや遊女たち」が、彼ら彼女らの前に神から遣わされて現れたバプテスマのヨハネの説教を聞いて、ヨハネの言うことを信じました。

そしてついにはヨハネに続いて神から遣わされて彼ら彼女らの前にお現れになり、ヨハネが指し示した「義の道」であるイエスをキリストと信じてイエスにつき従うようになっていました。

そうやって罪深い「取税人たちや遊女たち」が自分たちの罪を認めて、イエス・キリストを信じて神に立ち返って—即ち、悔い改めて—いました。

そのようにして彼ら彼女らはイエス・キリストによって、幸いな神の御支配の下に入っていた、つまり本当に「神の国に入」っていた、救われていたのです。

それが天の父なる神の願い、みこころにかなったことでした。

そのように、「取税人たちや遊女たち」は、初めは「行きたくありません」と拒否していたけれども「後になって思い直し、出かけて行」って父に従った「兄」にたとえられたのです。

さてその一方で「あなたがた」祭司長たちや民の長老たちは、初めは『「行きます、お父さん」と答えたが行かなかった」(30)、そうやって父に従わなかった「弟」(直訳「他の者、別の者」)にたとえられました。

彼らは表向き、建て前としては、神と宗教に熱心で信仰深そうであり、神殿の管理をし、そこで立派な儀式を行い、人々を指導していました。

そのようにして、「行きます、お父さん」と実に立派な、模範的な答えをした(またはいつもしていた)のです。

しかし、「行かなかった」、つまり神の「願ったとおり」、みこころのとおりにはしていませんでした。

彼らは、彼らの前に神から遣わされて現れたバプテスマのヨハネの説教を聞いても、ヨハネの言うことを信じませんでした。

そしてヨハネに続いて神から遣わされて彼らの前にお現れになり、ヨハネが指し示した「義の道」であるイエスをキリストと信じず、イエスにつき従うこともしませんでした。

彼らはイエス・キリストなしで、自分たちの力で宗教で「義の道」を進んでいる、進んで行ける、そして幸いな神の御支配の下に入る、つまり本当に「神の国に入る」ことができる、救われると思いがっていました。

彼らは「取税人たちや遊女たち」に対しては『「罪人たちよ悔い改めなさい。神に立ち返りなさい』と声を大にして言っていました。

しかしそれとても神殿での供え物や儀式によって、律法の行いによって、つまりイエス抜きで、ということではかありませんでした。

ですから、「取税人たちや遊女たち」がイエスのところに行って、イエスを信じて、イ

イエスによって悔い改め、神のもとに立ち返り、「あなたがたより先に神の国に入」っているのを「**見ても、後で思い直して信じることをしませんでした**」。

むしろ「**見ても**」「俺たちはあんな『**取税人たちや遊女たち**』みたいな罪人らとは違う」、「あんな人たちと同じこと（イエスを信じてイエスに従うこと）なんかできるか」とますます心頑なになっていったのでしょう。

なお、「**弟**」が言った「**お父さん**」（30）の直訳は「**主よ**」です（欄外注）。

ここでは父に対する敬称として「**主よ**」と言っているのですが、それは、それだけ父を重んじ敬っていることを表す言い方でした。

しかし、実はそれはうわべだけであり口先だけで、実際には「**父の願ったとおりに**」、つまり父の御意思・みこころのとおりには彼らは行動しませんでした。

「わたしに向かって『**主よ、主よ**』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。」（7:21）とイエスは既に教えておられました。

そんな彼らが「『**取税人たちや遊女たち**』と『**あなたがた**』、『二人のうちのどちらが父の願ったとおりにしたでしょうか』」とイエスに問われて、否応（いやおう）なしに「『**取税人たちや遊女たち**』です」と答え（させられ）たのでした。

こうしてイエスは「『**あなたがた**』は『**父の願ったとおりにし**』ていないと彼らに指摘なさいました。

「あなたがたは天の父なる神のみこころに従っていない。みこころを行っていない」とイエスはお示しになったのです。

それはまた「**私たちは天の父なる神のみこころに従っていない。みこころを行っていない**」と彼らは自らの罪を思いもかけずに自白させられたということでもあります。

そんな自らの罪深さにに彼らは気が付いたのでしょうか。

そして心を痛め、イエス・キリストに信頼して（信じて）、神のもとに立ち返る（悔い改める）ようになったのでしょうか。

「**取税人たちや遊女たち**」がここでは代表として名指しされたのですが、どんなに罪深く、神を拒絶したような人でも、「**後で思い直し**」、イエス・キリストを「**信じ**」て神のもとに立ち返る人こそは神の最善の御支配を受けていつまでも生きる—つまり神の国に入る—ことが許されるのです。

これは、あの祭司長たちや民の長老たちにとってはなぜか“不都合な真実”でした。

しかしそれが、イエス・キリストが今日も私たちに語りかけ、教えてくださった（くださっている）、希望の良き知らせです。

私たちも、今からでも、今すぐ「**思い直して信じる**」ならそれをするのに遅すぎることは決してありません。